

北海道開拓に寄与した樺戸集治監 月形樺戸博物館

月形町 教育委員会 主幹（学芸員） 野本 和宏



月形樺戸博物館

HPはこちら



月形町の歴史

月形町は、明治14（1881）年に設置された「樺戸集治監」によって拓かれたまちです。樺戸集治監とは、明治維新期の政治犯や重罪人などが収監された国立の監獄で、宮城、東京に次ぎ、北海道で最初に設置された集治監（現在の刑務所）です。

北海道に集治監を設置するため、伊藤博文内務卿の命令により開拓史の長であった黒田清隆が道内から3か所の候補地を選定し、そのひとつが現在の月形町でした。北海道内陸部の調査は内務省の役人8人で行われ、調査の団長は内務省権正書記の月形潔でした。

月形町は、樺戸連山と大河石狩川に挟まれた囚人が脱走するには難しい地形であり、平地は密林地帯を開墾すれば農地として利用でき自給自足を実現できる適地である旨、伊藤博文内務卿に報告し設置することが決定しました。

人の住んでいなかった密林地帯に樺戸集治監が建

設・設置され、その周りに商人や移民が定住するようになりまちが形成され、空知管内で最初に設置されたまちとなりました。

町名の由来

はじめこの地は「シベツブト」と呼ばれていましたが、まちの名前を新たにつけることになり、初代典獄（刑務所長）の月形潔の姓から「月形」と名付けられました。

三縣巡視復命書

樺戸集治監の運営が始まり、当初は農地開墾を主として、自給自足で運営されていました。

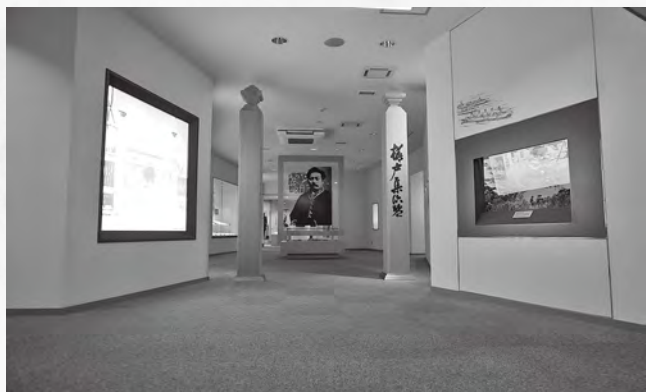
その後、太政官大書記官金子堅太郎が北海道を巡検した中で、当時の北海道は札幌県、函館県、根室県と三つに分かれており、連携が取れておらず、開拓も進んでいない状況にあったことから、ロシアの南下政策

を防ぐためにも早急に開拓を進める必要があり、このため囚人を使って道路をつくり、屯田兵や移民を入植させることを伊藤博文に復命しました。これが三縣巡視復命書です。

北海道は屯田兵や移民が入植し開拓したことはよく知られていますが、内陸部の地域が発展することができたのは、集治監に収監されていた囚人による農地開墾や道内の主要幹線道路の開削などの作業の賜物であり、北海道開拓の礎を築き上げたと言っても過言ではないと思います。しかしながら、この歴史の詳細はほとんど表に出ることはなく、知っている人は少ないでしょう。

月形樺戸博物館

当博物館は、樺戸集治監の歴史に着目し、多くの人に樺戸集治監が北海道開拓の歴史の一端を担っていたことを教えてくれる施設となっています。博物館の建物は3つあり、地下通路や渡り廊下でつながっています。



博物館本館

1つ目は、旧樺戸集治監本庁舎で、当時は事務所として使われていました。現在の建物は明治19（1886）年に建てられたものです。初代の建物は明治14（1881）年に建てられ開庁しましたが、明治19（1886）年に火災で本庁舎は焼失し、その後建てられたのが現在の本庁舎となります。大正8（1919）年に監獄が廃監になった後は月形村役場庁舎として使用され、その後、昭和

48（1973）年から北海道行刑資料館となり、平成8（1996）年からは月形樺戸博物館の構成施設となりました。本庁舎建物の基礎石は札幌の石山軟石が使われています。建物は、寄棟づくりで下見板張りの造りとなっており、重厚感のある歴史的な建物です。室内は典獄室（所長室）を再現した部屋や集治監全体の建物を再現した模型などを展示しています。

2つ目の建物は、文書や辞令書、看守に関連する資料、鉄丸といった当時の貴重な資料を見ることができます。また、映像シアターでは2本の映像を見ることができ、より理解を深めることができます。



看守や囚人に関する当時の資料

3つ目の建物は、月形町出身の彫刻家・本田明二氏^{ほんだめいじ}の彫刻を展示しています。有名な作品としては、旭川市のスタルヒン球場にあるスタルヒンの銅像があります。ギャラリーでは見る人を引き付けるような作品を展示しています。

月形町は、樺戸集治監に収監されていた囚人や見張り役の看守などがいたことにより、商人や移住民が定住し、まちが拓かれました。

ほかではあまりないまちの繁栄の仕方ではありますが、ここ月形がなければ今の北海道はなかったかもしれません。

皆さん一度、月形町を訪れて樺戸集治監の歴史に触れてみてはいかがでしょうか。